

実践記録

子どものつぶやきから始まった「釣り」との出会い 福岡市 いちざきみんなの家

釣りに出会った2歳児

ある日、図鑑を見ていた2歳児が「ジンベエザメを釣りたい」とつぶやきました。それなら釣りに行こうと、2歳児クラスで出かけました。釣りにすっかり魅了された子どもたちは、翌日には釣り場を作り始め、身近にある道具を使って釣り竿も作りました。なかには「本物の針みたい」と、釣り針に似ているS字フックを使って作る子どももいます。そんな姿を保護者と一緒に見守り支えたいと、保護者参加行事で釣りごっこをやってみたところ、園での釣り活動に参加する保護者もほかに増えました。この取り組みを通じて、子どもを中心に保護者、保育者が同じワクワクした気持ちで共有する同志になりました。また、子どもたちのより科学的で豊かな発想は、とどまることを知らないのだと確認できました。

興味が育ち、生活になる

5歳児クラスになっても、魚や釣りへの関心は色あせることなく、日々の生活に深く根ざしていきました。保育室の壁には、漢字と英語で名前が書かれた魚の写真が並びます。文字への関心も広がり、魚の名前を指さしながら「これは、ぶり」って書いてあるね！」と友だちと話す姿も見られるようになりました。保育室の一角に、子どもたち自身が環境づくりができるスペースを設けました。「みんなが納得してつくること」という約束だけを決め、そのほかの細かいルールは子どもたちに任せました。すると、子どもたちは自分の考えを積極的に出し合い、ときには意見をぶつけ合いながら話し合っており、工夫を重ね、創造的で魅力的な子どもたちが考え出したスペースができていきました。

ある日、「○○を釣りたい！」という声をきっかけに、子どもたちと一緒に釣り具店へ行ったときの事です。お

店の人に「おじちゃん、どうしたら○○が釣れるの？」と自らたずねる姿に、目的意識と探求心の成長が感じられました。仕掛けやえさを工夫し、試行錯誤するなかで、釣りは「やってみる」と「考える」ことの繰り返しであるとして、子どもたちは体験を通して理解していきました。

命にふれて、感謝を知る

また、釣れた魚を栄養士が目の前でさばいて調理してくれたことがありました。また「生きている魚」が「食べ物」になるまでの過程を間近で見たり子どもたちは、「いただきます」の意味を深く感じています。生きてたんだよね」「残したらかわいそう」としんと口にするところから、命への敬意が育っていることを実感しました。

釣りごっこもさらなる発展を見せ、図鑑を見ながら魚を模写したり、廃材を使って立体的な魚を作ったりと、より

リアルな表現活動につながっていききました。とくに釣り竿作りは進化し、七夕のササを乾燥させて本物のリールをつけるといふ本格的なものも出てきました。釣りがからまないようにするにはどうすればよいかと考える、クリップをペンチで曲げて貼りつけるという工夫も発見しました。

自信をもって、自分で挑む

運動会では、食材を集めるカードゲーム「レシピ」を応用し、魚料理をテーマにした競技を子どもたち自身で考案しました。「アジフライ」「シーフードカレー」と、自分たちでレシピを決め、調理する動きを取り入れてあそびました。あそびが行事に発展し、子どもたちのアイデアがあふれる場となりました。

かつて2歳児クラスで一緒に釣りに出かけたメンバーが、再び釣りに行ったときのことです。当時はえさをつけているのも、おとなの手を借りていた子どもたちが、今では自

保育ヒント

子どもの成長を感じて

「釣り」というひとつのテーマ分たちで準備し、釣った魚も針からはずせるようになっていきました。その姿に、積み重ねた経験と成長を感じました。

分たちで準備し、釣った魚も針からはずせるようになっていきました。その姿に、積み重ねた経験と成長を感じました。

子どものことばを聞く力と保育の質

清水 陽子

この実践は、2歳児のときに、「ジンベエザメを釣りたい」というひとりの子どものつぶやきに着目し、釣りを保育活動に取り入れたことに始まり、5歳児に成長したときに、子どもたちが魚とのかかわりを多様に展開させたプロセスをつづった記録です。

私も以前、沖縄美ら海水族館のジンベエザメの姿をテレビで見て、その大きさに圧倒され、悠々と泳ぐ姿がとても魅力的だと感じま

マを通して、子どもたちは探求心を深め、技術を身につけ、命に向き合い、仲間と協力する経験を積んできました。保育者として、子どもたちの興味やつぶやきを聞いてねいに紡ぎ、日々の保育に学びを

した。この実践記録を読んだ最初、おとなも幼児も感動したり心を動かしたりすることに、共通点があると思えました。

2歳児が実際に魚釣りを体験することはあまりないですが、四方を海に囲まれた日本の子どもにとって、魚釣りは身近なことです。また、魚をさばいて子どもに見せることで、魚の命をいただいていることに気づき、食育にもつながったこの実践は、保護者も巻き込んで、海やその生物に目を向ける環境教育に発展したことでしよう。

OME P (世界幼児教

見いだすことの大切さをあらためて実感しました。そして、何よりも、子どもたちが自分で考え、自分で動く姿を見守る喜びは、保育の原点であると感じました。

育・保育機構)のESD教育評価指標「環境的な持続可能性について」には、「子どもと大人の日々の実践において、生態学的な持続可能なアプローチに取り組むために、園ではプロジェクトやグループ活動に参画し、人間の生存に関係する基本的な人権、人間が自然とすべての生物と人間以外の世界に依存していることの探究を課題」として取り組むことの重要性が記されています。まさにこの実践は、この課題の取り組み方へ示唆を与えるものといえるでしょう。

(九州産業大学教授)